

# 『伝えたいこと』

濱崎洋三著作集

定有堂書店

二八〇〇円（本体価格・税別）

鳥取県庁の前にある武家門の角あたりで、朝、ぼくはよく浜崎洋三先生に会った。「おはよう」。「どうですか」「雑用、雑用ばかり。そっちは忙しい?」「こっちも雑用で」。先生は県立図書館へ、ぼくは赤十字病院へと、それぞれの職場へ向かった。ここ鳥取は先生の生まれ故郷、ぼくにとっても生まれ故郷。先生が教師として教壇に立った鳥取西高は久松山のふもと、武家門から振り返るとついそこにあり、ぼくはその高校で先生に日本史を教えてもらった。

先生ががんの末期を迎えた夏、先生に補習授業をもらったらどうだろう、とぼくは思いついた。先生なら受けて下さるかも知れないと思って電話をかけた。「三十分だけだな、声が続かん」。「題はどうしましょう」と聞くと、「私にとって戦後とは何か」にしよるか」と言われた。「死ぬ話はせんぞ、涙がでるから」とも。それから「いや、簡単なのでいいこう、『伝えたいこと』にしといてくれ」と言われた。

## 伝えたいこと

濱崎洋三著作集



故郷を愛した高校教師がいた。病気で死を真近にした夏、母校での最後の夏期補習授業の教壇に立った。1か月後、他界する。独自の地方史観、独自の思想を切り拓いた著者の文章、講演録から、読者は「日本とは何か」「郷土愛とは何か」「生きるとは何か」を改めて問われ、自問自答するだろう。そうさせる温かい教師愛が、この書の底には流れている。

（鳥取赤十字病院 内科医 徳永 進）

定有堂書店

ぼくは同級生や先輩に急いで電話をかけ、一週間後に母校の旧校舎で先生の夏期授業があることを知らせ、皆にも知らせられるように頼んだ。がんの末期、死を間近に迎えて、先生は何を語ってくれるのだろう。一九九六年八月十七日、午後二時、「起立っ!」と五十代の元生徒が声をかけた。「礼!」。約百人の生徒が椅子に坐った。夏期補習授業が始まった。三十分の予定の補習授業は七十分となった。題にふさわしい話だった。目に涙を浮かべる元生徒が多かった。教室を出ると先生は言った。「途中から痛みが消えてな、この調子なら、冬季補習授業もやってみようか」。先生はその一か月後に、他界された。

この本の中には、最後の補習授業や先生の史論や評論、自由な文章などが収められている。

この本は、徳永先生の『やさしさ病棟』の中で、「星野先生の補習授業」（一九三頁）という章に出てくる話（きっかけで、教え子（徳永先生もそうです）の人たちが中心になって作られた本です。「伝えたいこと」は、「大声で叫ぶ人、人を動かそうとする人、そういう人達こそを信じてはならない」という話で始まります。乞うご一読。

（鳥取赤十字病院 内科医） 徳永 進

定有堂書店

〒680 鳥取市元町1 2 1 TEL 0857(27)6035 FAX 0857(27)6035